スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2023年 170号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS　No. 170 December 2023

研究の最前線

2023年度冬期国際シンポジウム開催される

2023年12月7･8日に冬期国際シンポジウムが開催されました。今回のテーマは “Borders, Boundaries and War across Eurasia: Cycles of Violence and Resilience” でした。センターは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトのグローバル地域研究推進事業「東ユーラシア研究プロジェクト」（以下 EES）における四拠点のひとつ（他に東北大学、国立民族学博物館、神戸大学）として、文化衝突とウェルビーイング、とりわけ「越境とジェンダー」を中心テーマとする事業を実施しています。今回の国際シンポジウムは、EES 四拠点が輪番で開催する国際シンポジウムという位置づけでもあり、科学研究費基盤研究（A）「戦後北東アジアにおける歴史的分岐点のマルチアーカイブ分析」とともに主催することになりました。シンポジウムは対面･オンライン併用のハイブリッド形式で開催され、外国からは、ウクライナ、ロシア、イギリス、アメリカ、フィンランド、モンゴル、オーストラリア等 12 か国計 13 名（内オンライン 3 名）が参加し、国内からの参加者を含め盛会となりました。第 1 日目の内容を EES が担当し、基調講演を含め 10 の報告がなされました。パネル 1 では日本、フィンランド、モンゴルというロシアの隣国の視点からウクライナ戦争を議論し、そのあとの基調講演と合わせて、ボーダースタディーズの研究成果が示されました。パネル 2 では、「戦争とフェミニスト」をテーマに、ウクライナ戦争における女性たちの闘いが描き出され、パネル 3 はプーチン体制下における市民の抵抗運動

活発な討論が行われました（左：Kondakov 氏）

やクィア・セクシャリティの動向が分析されました。第２日目は北東アジアの冷戦に関する６本の報告が行われました。パネル４では戦後北東アジア史において日本が果たした役割について、パネル５は台湾、モンゴル、韓国という地域と冷戦の関係が議論されました。第１日目と第２日目の内容はつながりが薄いように見えますが、現在ウクライナやパレスチナで起きていることの根幹には戦後の国際政治秩序のあり方が問われており、第１日目の関係者は戦後北東アジア史の事例から学ぶべきところは多いと、熱心に議論を聴いていました。エクスカーションでは北海道博物館を訪問し、外国ゲストから日本におけるアイヌ復権運動や女性運動について熱心な質問を受けたことが印象的でした。また、EES 国内参加者からは、今回の登壇者を軸に別な研究プロジェクトを企画したいという意見もあり、さらなる研究協力の拡大につながる有意義なシンポジウムとなりました。

［井上］

２日間の議論を終えて

ウクライナ及び隣接地域研究ユニット（通称：ウクライナ研究ユニット）設立事業採択される

2023 年 11 月 14 日に北海道大学における「各部局の強み・特色」を促進する新規の事業として、スラブ・ユーラシア研究センター内の研究ユニットの一つとしてウクライナ及び隣接地域研究ユニット Research Unit for Ukraine and Neighboring Areas（通称：ウクライナ研究ユニット “Ukraine Research Unit”）設立事業が採択されました。この事業は 2023 年から 2025 年３月にかけて、その後の事業拡大を見込んだスタートアップとして取り組まれることになります。ロシアによるウクライナ侵攻を受け、その背景や現状の正しい理解、今後の対応のための知見を得ることは、世界にとって喫緊の課題であると言えます。スラブ・ユーラシア研究センターは、創立以来 70 年近く学際的な人文社会学研究を推進してきた強みを生かし、①ウクライナ関連図書コレクションの構築、②国内外のウクライナ研究の国際ネットワークの拡充、共同研究の実施・成果発信、③一般社会へのアウトリーチ活動、などの活動を積極的に行う予定です。［青島］

生存戦略研究

昨年度に始まった生存戦略研究は、現代世界における戦争と平和を左右しているロシアと中東を同時に捉える視座の提供を一つの柱としていますが、長引くウクライナ戦争と直近の中東情勢はわれわれの見立ての正しさを証明しています。これに直接かかわるセミナーをはじめ、実に多種多様な研究会を国内外で数多く開催しています。
https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/srcw/

今年度のこれまでの主要なイベントは、6 月のウクライナ・イニシアティヴと 7 月の夏期国際シンポジウムですが、これらについては、前号で詳細に紹介されているところです。ここでは、それ以外の国際的な取り組みを紹介します。

生存戦略という観点から見たウクライナの研究については、夏に滞在したセルヒー・プロヒー氏、オレシャ・フロメイチュク氏に続き、9 月から滞在中のミコラ・リャプチュク氏から多くのインプットを得ています。氏が政治学者であると同時に文学者でもあり、夫人のナタルカ・ビロツェルキヴェチ氏は詩人であることから、両氏の滞在は戦時の社会における文学・文化の役割についても考える機会ともなっており、特に 11 月の研究会でのビロツェルキヴェチ氏による詩の朗読は好評でした（別記事参照）。

また、現在の旧ソ連地域でロシア・ウクライナ戦争に次ぐ悲劇的な紛争であるナゴルノ・カラバフ問題にも、注意を払い続けています。センターと付き合いの深い人類学者、ノナ・シャフナザリャン氏を 4 月にアルメニアから招く計画は、事情により実現できませんでしたが、オンラインで 3 回の連続講演を開き、2020 年の戦争の避難者のトラウマ的な経験のほか、ロシアのアルメニア語話者ムスリムなど興味深いテーマのお話をいただきました。8・9 月には宇山研究員が科研費でアゼルバイジャン、ジョージア、アルメニアを訪れ、それぞれ異なる国際環境での各国の切実な生存戦略を調査しました。

昨年度に始まった、オーストリア科学アカデミーのパオロ・サルトリ氏率いる The Committee for the Study of Islam in Central Eurasia との協力が深まっています。まず、6 月 26 日から 30 日までウィーンにて、サマースクール The Archives of Islam in the Russian Empire (16th-early 20th Centuries) を開催しました。これは、テュルク語とロシア語の文書を読み解く訓練をするもので、国際公募でおよそ 2 倍の競争を経た 11 名の傑出した大学院生が集まりました。北米からの参加者が多く、しかもハーヴァード、イェール、プリンストン、コロンビア、シカゴといったところから人が集まるのは、サルトリ氏のカリスマだと感心しました。もちろん、こんな人たちに何をどう教えたらよいのだろうとたじろぎましたが、自分が一番面白いと思うタタール語史料を一緒に議論しながら読み解く作業は、なかなかスリリングで貴重な体験でした。他の講師の講義も素晴らしく、大学院生時代にもっとこういう経験を積んでおくべきだったと大いに後悔しました。来年は 7 月の第一週に計画されています。後日、国際公募が予定されています。

次に 9 月 13・14 日には Muddying the Waters: Towards a History of the Caspian Sea というシンポジウムを行いました。これは、上記 Committee のメンバーである野田仁氏も企画に加わり、センターと東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との連携事業の一環としても位置付けられます。センターからは、長縄のほか井上岳彦助教が参加しました。プログラ

ムはこちらから：
https://www.oeaw.ac.at/fileadmin/kommissionen/islam-centraleurasia/Programm-SICE-Muddying-the-Water-V29-08-2023-Druck.pdf

文化・言語部門では、外国人招へい教員としてセンターに滞在したロバート・グリーンバーグ教授（オークランド大学）と共同で、社会言語学の視点から現在のウクライナ戦争を旧ユーゴスラビア紛争と比較する研究を行いました。また少数話者言語に関する複数の研究が進められ、野町研究員がクリスティナ・クレイマー名誉教授（トロント大学）を今秋招へいし、少数話者言語をめぐる翻訳論について言語文化の保全戦略を含めて検討しました。同じ時期に部門のメンバーの菅井健太准教授（文学研究院）はヨフカ・ティシェヴァ教授（ソフィア大学）を招へいし、マイノリティの言語文化維持に関する講演会や現代ブルガリア語に関する講義を札幌・東京・神戸で組織しました。同じく部門のメンバーの田村容子教授（文学研究院）はサイノフォン（中国語圏）という概念から現代中国文学の見直しを進めていますが、これに関連して宋明煒教授（ウェルズリー大学）を７月に招へいし、ジェンダーやポストヒューマンという最新のトピックから SF について各地で研究集会を開催しました。安達研究員は、ロシアの大衆文化をメロドラマとして理解する研究を提唱しており、ダニエル・ポッホ准教授（香港大学／早稲田大学）を 11 月に招いて近代日本文学との比較を行うとともに、外国人招へい教員として現在センターに滞在中のマーク・リポヴェツキー教授（コロンビア大学）とともに現代ロシアにおけるメロドラマ文化と政治の関係について研究を進めています。

９月から 11 月には、モスクワの高等経済学院から２名の女性の大学院生を受け入れました。高等経済学院の歴史学部は、博士論文執筆の最終段階の大学院生に西側の文献を渉猟し、英語での議論を身につける機会を提供してきましたが、戦争のために欧米の門戸が閉ざされてしまいました。そこで、旧知のエカチェリーナ・ボルトゥノヴァさん（2019 年にセンターの冬期国際シンポジウムも共催）から、自分の学生を個人の資格でセンターに滞在させることは可能だろうかと打診を受け、引き受けることにしました。２名のうち一人は、ニコライ一世の宮廷の女官に着目して、（多くは未婚の）宮廷女性の婚姻や地位上昇というミクロな人間関係から、ドイツ人やポーランド人貴族がいかに「ロシア人」の宮廷を演出していたのかという帝国論までを射程にいれる研究に取り組んでいます。もう一人は、日露戦争前の極東における不凍港の模索がペテルブルグの様々な官庁の間でどのように議論され、それが極東での外交、軍事、商業にどのような影響を与えたのか、という研究に取り組んでいます。賛否両論あるところですが、将来のためにロシアの研究者、とくに若手との関係を絶やさず、親日派を作っておくことは大切だと考えています。

年末から年度末にかけても、冬期シンポジウムのほか、大きな企画が動いています。12 月 11 日には、センターと部局間協定を結んでいるユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのスラブ・東欧学研究所と共催で、ワークショップ Ends of Empires: Crisis and Resilience in the Long Twentieth を開催しました。センターからは、青島研究員、黒木研究員、長縄が参加しました。「長い 20 世紀」「ポスト・オスマン空間の宗教と民族」「ウクライナ戦争における脱植民地化と帝国の誘惑」という三つのセッションを設けました。
https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/srcw/events/20231130978/

そして、２月 7-8 日に生存戦略研究の全体集会を行います。２月７日は、「脱植民地化を再考する」という日本語のワークショップになります。ウクライナ戦争をきっかけに、スラ

ブ・ユーラシア研究が暗黙に前提としてきたロシア中心主義的な見方をどのように克服すべきかが問われています。とはいえ、スラブ・ユーラシアの周辺、とりわけ東アジア、南アジア、中東については、それぞれの地域にあった帝国の遺産と向き合う研究が積み重ねられてきています。今回は、ディシプリンを越えてこれらの地域で蓄積されてきた知見や議論に学びながら、スラブ・ユーラシア研究にどのような新しい地平が開けるのかを模索したいと思います。2月8日には、北大内のプロジェクトとしてウクライナ及び隣接地域研究ユニット（通称：ウクライナ研究ユニット）を立ち上げるのにも合わせて（これについては前記事を参照）、ユーラシア大陸の危機について考える国際研究集会を計画しています。ウクライナ、ナゴルノ・カラバフ、パレスチナを事例に、人道危機に対して人文系の研究者に何ができるのか、何をすべきか／すべきでないかについて意見交換する場になることが期待されます。［長縄／宇山］

2023年度公開講座「どうなる？ どうする？ 日露関係」開催される

2023 年 10 月 16 日から 11 月 10 日にかけて、スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「どうなる？ どうする？ 日露関係」が、全 7 回のプログラムで開講されました。伝統的に 5 月頃に実施されてきた本イベントですが、今年は初めて秋の開催となりました。

公開講座は、スラブ・ユーラシア研究の成果を一般社会にも還元すべく、年に一回開講しているものです。従来は地元札幌の市民の皆さんを中心に対面での開催でしたが、コロナ禍をきっかけに Zoom でのリモート視聴にシフトし、日本各地はもちろん海外からのご視聴も増えています。対面とオンラインのハイブリッドで開催された今回の公開講座では、リアルタイムで延べ 1,200 名ほどの皆様にご参加いただき、そのうち圧倒的多数はオンラインでのご視聴でした。

さて、本年の公開講座では、日露関係という重いテーマを敢えて取り上げました。2022 年 2 月 24 日にロシアがウクライナへの全面軍事侵攻を開始したことにより、世界は変わってしまいました。日本とロシアの関係も大きな影響を受け、ウクライナ戦争の前と後とで、様相が一変しています。日本は、主要先進国から成る G7 の一員として、ロシアの侵略行為を非難し、経済制裁を発動しています。対するロシアの側も、日本を含む先進諸国を「非友好国」と位置付け、敵対的な姿勢を強めています。

しかし、日露関係がウクライナ戦争の前は順調だったかというと、決してそうではありません。対露関係を改善して北方領土問題を解決し、平和条約を締結しようという

安倍晋三政権の試みが頓挫したことは、同政権の末期には明白でした。ウクライナでの戦火は、いつかは止むはずです。しかし、仮にその障害がなくなったとしても、日露関係の根本的な難しさは、おそらくはより増幅された形で、残ると考えざるをえません。混沌とする世界の中で、我が国は北の隣国とどう向き合っていけばいいのでしょうか？

今回の公開講座では、このように我が国にとっての重大な課題となっている日露関係を、国際関係、外交、軍事、貿易、エネルギー、漁業、文化の各専門家が、それぞれの立場から読み解き、未来への指針を示すことを目指したものです。なお、各講演は一部を除き YouTube でのアーカイブ視聴が可能ですので、お見逃しになった方も、ぜひチェックしていただければ幸いです。

https://www.youtube.com/@srchokudai2743

［服部］

第１回	10/16（月） （ハイブリッド講義）	日露ビジネスは退くも残るも茨の道	スラブ・ユーラシア研究センター 教授 服部　倫卓
第２回	10/20（金） （ハイブリッド講義）	重大な岐路に立たされる日露漁業外交	北海学園大学 地域経済学科　教授 濱田　武士
第３回	10/23（月） （オンライン講義）	日露文化交流：アートを通じた国際理解と地域創生	早稲田大学 教育学部　教授 鴻野　わか菜
第４回	10/27（金） （オンライン講義）	ロシアから見た極東の軍事的位置付け：2030 年代の極東ロシア軍を考える	東京大学先端科学技術研究センター　専任講師 小泉　悠
第５回	10/30（月） （オンライン講義）	日露関係の現在位置：安倍・プーチン交渉が残したもの	朝日新聞論説委員 駒木　明義
第６回	11/6（月） （ハイブリッド講義）	国際関係と地政治のなかの日露関係	スラブ・ユーラシア研究センター　教授 岩下　明裕
第７回	11/10（金） （オンライン講義）	日露エネルギー協力の再評価と見直し：ウクライナ危機とカーボンニュートラルの試練	エネルギー・金属鉱物資源機構調査部調査課長 原田　大輔

公開講座の会場の様子

附置研・センター会議第 3 部会シンポジウム開催報告

2023 年 10 月 13 日（金）、国立大学附置研究所・センター会議第 3 部会（人文・社会科学系）シンポジウム「危機の世紀」が開催されました。本イベントは、本センターが本年度第 3 部会の責任研究機関だったことで、組織されました。第 1 部会（理工学系）、第 2 部会（医学・生物学系）のシンポジウム開催方式と足並みを揃えて、内部関係者を除き、完全オンラインでの開催となりましたが、幸いにして 100 名以上に御視聴いただけるものとなりました。あらためて御協力いただきました全ての方々に心より御礼申し上げます。プログラムは以下の通りでした。

司会：村上　智見（スラブ・ユーラシア研究センター　特任助教）

【開会挨拶】

髙橋　彩（北海道大学　副学長・理事）

【報　　告】

「14 世紀の危機の語り方：ヨーロッパ到来以前の黒死病」

諫早　庸一（スラブ・ユーラシア研究センター　特任准教授）

「15 世紀の危機と 17 世紀の危機：東アジアを中心に」

中島　楽章（九州大学人文科学研究院　准教授）

「長い 20 世紀の終焉」

長縄　宣博（スラブ・ユーラシア研究センター／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　教授）

【総合討論】

ディスカッサント：岡　美穂子（東京大学史料編纂所　准教授）

【閉会挨拶】

野町　素己（スラブ・ユーラシア研究センター　センター長・教授）

当シンポジウムは、「13 世紀世界システム」からの転換である「14 世紀の危機」に始まり、15 世紀および「17 世紀の全般的危機」を経て、現在の 21 世紀における「長い 20 世紀」の終焉までを扱った長大な時間軸でのものとなりました。もちろん個々の報告で扱われたテーマは多岐にわたりましたが、まずは長縄報告「長い 20 世紀の終焉」におけるグローバル化についての言明が印象的でした。1870 年代以降の第 1 次グローバリゼーションから現在、つまりポスト冷戦期の国際秩序の終焉までを「長い 20 世紀」と定義する長縄氏は、グローバル化とは価値観の普遍化でありつつも、ローカルな問題に世界が巻き込まれていく過程でもあるとしているのです。こうした見方は 14 世紀にも当てはまります。例えば先のスラブ・ユーラシア研究センター 2023 年度夏期国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14 世紀の危機」を思考する」では、ディ・コズモ氏がモンゴル帝国時代（1206–1368 年）のグローバル化の特徴について、或る地点で起こったことの影響が他所にまで連なっていくことだと述べていました。例えば当時の二大海洋国家であったジェノヴァとヴェネツィアはアフロ・ユーラシアを「つなぐ」一方、それによりこの世界のリスクをも高めていました。そ

れが顕在化したのが諫早報告「14 世紀の危機の語り方：ヨーロッパ到来以前の黒死病」の主題となった黒死病なのです。

次の中島報告「15 世紀の危機と 17 世紀の危機：東アジアを中心に」で焦点が当てられたのが「フロンティア」です。北半球において、15 世紀は 14 世紀よりもさらに気温の低い時代であったにもかかわらず、危機は全般的なものとはなりませんでした。ヨーロッパにおいては、「14 世紀の危機」による人口の大幅減によって広大な「内部フロンティア」が生まれていましたし、例えばリトアニアの拡大に象徴されるように「外部フロンティア」も拡大していました。これらの「フロンティア」が危機への耐性をもたらしたのです。中国においても、土木の変（1449 年）などの政治的破局にかかわらず、全面的危機は回避されました。そこにも「内部フロンティア」の活用が深く関わっています。15 世紀中後期の寒冷化・乾燥化は、長江中流域の広大な沖積平野 / 氾濫原の水田開発を促進させます。これが 16 世紀以降の「湖広熟すれば天下足る」状況を生み出すのです。その一方で、逆に「14 世紀の危機」を小規模水田開発の成熟による「フロンティア」の活用によって乗り切っていた日本において、「15 世紀の危機」は全般的なものとなります。応仁の乱（1467–77 年）によって室町幕府の支配体制は破綻し、戦乱は全国に拡大するのです。

「内部 / 外部フロンティア」の開発の可否は次の「17 世紀の全般的危機」においても非常に重要な論点となるわけですが、ここでは特に「内部フロンティア」の開発に深く関わる農業の問題に触れておきたいと思います。中島氏によれば、元朝（1271–1368 年）は流通経済の発展に即した商業・都市を基盤とする支配体制を敷いており、それが寒冷化による急激な経済収縮によって生存危機に直面します。一方の明朝（1368–1644 年）は危機に対応した農業・農村を基盤とする支配体制を有していました。経済成長を前提としないそのシステムは、危機的状況には比較的強靱であったのです。3 報告に対してディスカッサントとしてコメントした岡氏も、農業を論点の 1 つに挙げていました。寒冷化による厳しい気候条件の下でも、農業技術の改良などによる「内部フロンティア」の活用によって、「危機」が回避されたこともあります。気候変動が直接社会を変えるのではなく、農村（農業生産）の健全さが重要なパラメーターとなって都市、ひいては国家の浮沈に大きく影響する状況を目の当たりにするとき、帝国支配と農業生産の関係性は、極めて重要であることが理解されます。そうしたなかで、食糧および資源の支配が現代の帝国主義とも直結している状況が見えてきます。このように議論を進めるなかで岡氏は長縄報告に対し、社会主義政権と農業の関係を問いました。ソ連や中国といった社会主義国家においては、「農業（自給）」がきわめて重視されてきたのです。食料自給率と帝国（被）支配との相関関係は、現代社会をも規定しているのです。

もちろん、ここまでで記した諸点はシンポジウムでの議論のごくごく一部ではありますが、これらを通じてシンポジウムの内容を垣間見ていただけたかもしれないと思っています。「危機」は今回扱われた世紀に限って発生したものではありませんが、このような事例を議論することが、それぞれの世紀に存在する「危機」を深考するきっかけになると思っています。今回のシンポジウムの 3 報告は、文章化も企画されています。こちらにも御期待いただければ幸いです。［諫早］

2023年 JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール開催報告

2023 年 8 月 24 日（木）・25 日（金）に、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）との共催で「スラブ・ユーラシア研究サマースクール」を開催しました。スラブ・ユーラシア地域の研究を志す学生を増やし、学生が学際的な研究を行えるよう支援・奨励することを目的としています。財源としては、JCREES の資金に加えて、百瀬宏氏（津田塾大学・広島市立大学名誉教授、1969–1971 年スラブ・ユーラシア研究センターの前身である法学部附属スラブ研究施設長）から本センターへの寄附を利用して行われました。百瀬氏からのご寄附は 2020 年に寄せられたもので、本センターでは「百瀬基金」を設立し、若手研究者を支援する百瀬フェローシップなどに活用しています。なお、JCREES は、ロシア・東欧学会、日本ロシア文学会、ロシア史研究会、比較経済体制学会、日本スラヴ学研究会の 5 学会で構成される組織で、本センターが事務局を務めています。

本サマースクールの参加学生は、全国の大学から公募で選ばれた 21 名で、内訳は学部 3・4 年生が 11 名、修士課程院生が 6 名、博士課程院生が 4 名でした。本サマースクールははじめて全面対面で実施されました。サマースクールでは、JCREES を構成する 5 学会から各 1 名の講師が派遣され、これに本センターの特任助教 1 名を加えた計 6 名の講師がスラブ・ユーラシア地域に関わる文学、文化人類学、デザイン学、考古学、経済学、歴史学の観点から講義を行いました。また、学生同士の交流や講師・教員との交流を目的に、学生 1 人 1 人が研究発表を行いました。講義や発表では、学生から多くの質問があり、活発な意見交換が行われました。一部の院生は、滞在を延長してスラブ・ユーラシア地域研究の蔵書が充実している附属図書館と本センター図書室で資料収集を行いました。

本センター村上智見特任助教による講義

参加学生による発表

参加学生は自分の専門以外の講義を受けたり、自分の研究分野に近い講師・教員からコメントを得たりして、コロナ禍後の札幌で有意義な時間を過ごしたように見受けられました。また、同世代の学生との交流からも大きな刺激を受けたようでした。このようなサマースクールは一昨年、昨年に続いて３回目となりました。来年以降の継続も検討していく予定です。［井上］

スラブ・ユーラシア研究センター＆ソウル大学
ロシア東欧ユーラシア研究所・合同セミナー開催される

2023 年 10 月 31 日、第 26 回北海道大学・ソウル大学共同シンポジウムのサテライト企画として、スラブ･ユーラシア研究センターとロシア東欧ユーラシア研究所による共催セミナーがスラブ・ユーラシア研究センター大会議室で開催されました。ソウル大のスラブ・ユーラシア研究は、長年、韓国をリードしており、ハ･ヨンチョル教授（現ワシントン大学）、シン･ボンシク教授など錚々たる研究者を輩出しており、センターとは長年にわたって研究交流が続いていました。ソ連解体後、中国や新生ロシアも含めた北東アジアにおけるスラブ・ユーラシア地域に関わる共同研究を一緒に構築してきたパートナーでもありました。

近年、コロナ禍などで交流が途絶えていましたが、このたび、北大・ソウル大の共同シンポジウム開催に伴い、新たなおつきあいが始まりました。今回のセミナーではジョン・ハキュング所長を始め、若手を含む女性を中心とした８名の研究者が来札され、センター側も中央アジア出身や外務省在籍中の若手研究者、米国籍の副センター長など多彩な顔触れで、２つのセッションを組みました（日韓それぞれ各４本の報告）。ウクライナ戦争により、ロシアとの研究交流が途絶えた現在、ともにロシアにより「非友好国」とされている日韓の研究者がどのような共同研究ができるのかを問題意識とし、現在の両国における研究状況、人文社会研究の役割、今後のロシアを始め、スラブ・ユーラシア地域の動向、これに日韓の研究者がどう関与するかなど、多岐にわたる議論が行われました。

終了後は、北大グッズの進呈、サッポロビール園での懇談会など、次年度以降の協力構築について話が盛り上がりました。私たちの時代を超えた出会いの機会を作ってくださった、北大及びソウル大の関係者のみなさまには心よりお礼申し上げます。なお、今回のセミナーの記録も刊行予定です。

https://hu-snu-jointsymp.com/programmes/slavic/

［岩下］

セミナー後の集合写真

国際ワークショップ Colonial and Postcolonial in Recent History of Central Asia の開催

センターは 2023 年 10 月 10 日に標記の国際ワークショップをハイブリッド形式で開催しました。これは、同月に客員准教授として滞在していたイリーナ・モロゾヴァ氏（レーゲンスブルク大学）の発案によるもので、客員教員が主体的にセンターで研究イベントを企画するという、模範的な例となりました。

ウクライナ侵略戦争で「脱植民地化」など植民地主義関連の概念が旧ソ連地域研究全体で注目されていますが、中央アジア研究では以前から、ソ連中央やロシアと中央アジアとの関係は植民地主義的なのか、そうだとしたらどのような意味でなのかについて、研究・議論が積み重ねられています。このワークショップでは、ソ連時代後半から現在までの中央アジアのコロニアル／ポストコロニアル状況を、外交、財政、環境、文化、歴史認識、伝統復興といったさまざまな角度から議論しました。プログラムは以下の通りでした。

15:30–17:20 (GMT+9)　Session 1: Soviet development policies and socialists plan in Central Asia

Irina Morozova, University of Regensburg / SRC

Diffusion of the Postcolonial: Reform in “Domestic Central Asia” in Relation to Soviet Policy in the “Foreign Orient” (the 1970–80s)

Isaac Scarborough, Leiden University (online)

Reconsidering and Recalculating Soviet “Subsidies”: Financial Transfers to the Tajik SSR in the 1970s and 1980s

Tetsuro Chida, Nagoya University of Foreign Studies

Scaling Down in Resolving Environmental Problems? The Decline of Gigantomania in the Soviet Union and the Aral Sea Crisis

Discussant: Timothy Nunan, University of Regensburg (online)

Chair: Norihiro Naganawa, SRC, Hokkaido University

17:30–19:20 (GMT+9)　Session 2: Cultural production and historical memory in late Soviet and independent Central Asia

Akira Matsumoto, Hokkaido University

Was the “Kyrgyz Miracle” a Product of Chance? The Self-Representation of the Kyrgyz in the Film *Manaschi* (1965)

Elmira Nogoibaeva, Center Polis Asia, Esimde Research Platform, Kyrgyzstan (online)

Memories of *Urkun* in 1916: De/anti-colonial Echo

Alima Bissenova, Nazarbayev University (online)

“The Man with the Character of Horse”: The Narratives of the Revival of Horse Herding and *Kokpar* in Kazakhstan

Discussant: Tomohiko Uyama, SRC, Hokkaido University

Chair: Yoko Aoshima, SRC, Hokkaido University

各報告のトピックは多様でしたが、議論を通して、ロシアとも第三世界ないし「グローバルサウス」ともつながりと違いの両方を持つ中央アジアという地域の位置が、浮き彫りになったように思いました。ヨーロッパや中央アジアからのオンライン参加者を交えての会だったため、日本時間ではやや遅い終了時間となりましたが、最後まで熱心な議論が繰り広げられました。［宇山］

ウクライナ関連イベント：岡野直氏講演会とウクライナ文学の夕べ

ロシアによるウクライナ侵略戦争は膠着状態にあり、ガザでの戦争勃発もあって国際的な注目がやや薄れかねない状況ですが、センターでは引き続きウクライナに関する諸事象を多角的に取り上げています（ウクライナ研究ユニットの発足については別記事参照）。

2023 年 10 月 12 日には、北海道大学大学院教育推進機構の主催、センターの共催により、岡野直氏の講演会「ウクライナに今生きる人が思うこと」が本学で開かれました。岡野氏は元・朝日新聞記者で、東はハルキウ、西はウジュホロド、南はザポリッジャとウクライナ各地で市民に密着した取材をし、光文社新書として『戦時下のウクライナを歩く』を出版したフリージャーナリストです。講演では、ロシア軍の砲撃で破壊された街の生々しい写真を見せながら、戦時下の市民生活と人々の思いを語りました。講演会には 100 名以上の北大生・教職員が参加し、特に学生たちは予定時間を超過して次々と質問をし、終了後も岡野氏の前に列を作って質問を続け、高い関心を示していました。当日の様子については、大学院教育推進機構広報チームによる下記リンク先のレポートをご覧ください。

ウクライナ文学の夕べでの
ビロツェルキヴェチ氏（左）とリャプチュク氏

https://note.com/rich_azalea304/n/n09e182958755
10 月 17 日には岡野氏をセンターに迎えて交流会を開き、親交と協力関係を深めることができました。

また、センターには 9 月からウクライナの政治学者ミコラ・リャプチュク氏が外国人招へい教員（外国人研究員）として滞在していますが、同氏は若い頃に詩人・作家・文芸評論家として活躍した経歴を持ち、夫人のナタルカ・ビロツェルキヴェチ氏も有名な詩人です。そこで 11 月 14 日に Ukrainian Literature Today: Is It a Time for Poetry during the War? と題するウクライナ文学の夕べをセンターで開催し、リャプチュク氏によるウクライナの文化状況の解説と、ビロツェルキヴェチ氏による詩の朗読を聴きました。ウクライナの詩人による詩の朗読を聴くのは日本では貴重な機会であり、ウクライナ語の音の美しさを堪能することができました。セルヒー・ジャダンをはじめ、1990 年代から活躍している文化人が今も新しいウクライナ文化を牽引しているというリャプチュク氏の指摘も興味深いものでした。戦争という悲劇に直面しながら常に新たな世界を切り開くウクライナの文化シーンに、今後とも注目していきたいものです。なお、このウクライナ文学の夕べについての岡野直氏のレポートが、雑誌『北方ジャーナル』2024 年 1 月号に掲載されています。
https://hoppo-j.com/corporation_iss.html?ISS=2024_01_6

［宇山］

北大総合博物館常設展リニューアル「国境観光　境界地域やまぐちの魅力」（2023年 10月から）

北大総合博物館 2 階スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット（UBRJ）ブースは、国境観光の様々なかたちと可能性を考える展示として、2023 年 10 月からの新展示「境界地域やまぐちの魅力」を開始しました。これは井竿富雄編著『ブックレット・ボーダーズ 10　知られざる境界地域　やまぐち』（国境地域研究センター、2023 年 9 月）（https://www.hup.gr.jp/items/79016739）とも連動した企画です。「くにざかい（国境）」としてのやまぐちを巡る旅をぜひ体験ください。長門市の大寧寺からお借りした「大内義隆」関係の資料は、今回特に目を見張るものがあります。幕末に長州藩の密偵として世界各地で活躍した仏教僧・香川葆晃の辞令も興味深いものです。また、山口県大津郡三隅町（現・長門市）出身の洋画家、香月泰男の代表作《シベリア・シリーズ》をスライドショーでご鑑賞いただけます。彼の北海道倶知安在住時代の写真コー

展示入口

ナーや木彫り人形のレプリカなども展示しております。さらに国後島と根室を結ぶ海底ケーブル通信庫の保存運動で知られる久保浩昭さん製作の電話やマイクスタンド、樺太国境標石 1 号レプリカなどもあります。国境写真家斉藤マサヨシさんの写真展も、写真集『ボーダーツーリズムの記録 1997–2022』から厳選した貴重なショットを刷新し継続中です。リニューアル展示のパンフレットを次の URL からご覧ください。

大寧寺からお借りした大内義隆像掛軸

https://hokudaislav-ees.net/news-event/20231128657/

［井上］

JIBSN セミナー 2023「境界地域の移住と観光を考える」開催される

2023 年 10 月 21 日に北海道の標津町で開催された境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）セミナー 2023「境界地域の移住と観光を考える」が無事終わりました。前年の竹富セミナー（石垣市竹富町役場庁舎で開催）を上回る 50 名を超える参加者が全国から集まりました。最も遠くからの登壇者は与那国町、竹富町の方々ですが、同じ道内とはいえ、陸路 8 時間をかけて来られた稚内市の存在も忘れてはなりません。境界自治体、学術機関で構成される JIBSN ですが、副代表を務める NPO 法人国境地域研究センターの会員も多数参加し、近年とくに一般市民にも広く開かれたものとなっています。

冒頭、代表幹事の工藤広・稚内市長のメッセージ代読から始まり、ホストの山口将悟・標津町長のご挨拶、来賓として大地みらい信用金庫の遠藤修一理事長のお言葉と続き、オンラインによるゲストとして沖縄県多良間村からの報告がありました。

セッション 1 は「移住」がテーマで、久保実・五島市副市長、伊賀敏治・対馬市しまづくり推進部長、西山一也・標津町企画政策課係長が登壇し、今野直樹・礼文町副町長、渋谷正昭・小笠原村長がオンラインで報告されました。

セッション 2 は「観光」に焦点をあて、竹本勝哉・根室市副市長、青木秀貴・稚内市企画総務部課長、田島忠幸・与那国町企画財政課長、高橋優人・竹富町自然観光課係長が登壇し、最後は再び渋谷村長がオンラインで発言されました。セミナーは、NPO 法人国境地域研究センターの田村慶子理事長の挨拶をもって閉会となりました。

セミナーにあわせて造成されたボーダーツーリズム、「内なる国境（くにざかい）ツアー」も盛況で、セミナー当日の午前中は、北方領土館、ポー川史跡自然公園、標津サーモン科学館を回るとともに、元島民の福澤英雄さんのお話を聞きました。翌日は羅臼町に足をのばし、羅臼町郷土資料館、国後展望台などを廻りましたが、一年で数えるほどしかないほどの好天

にめぐまれ、国後島がくっきりと崖までみえ、参加者一同、興奮しました。脇紀美夫・元羅臼町長／全千島歯舞諸島居住者連盟理事長の講話を聞く機会もあり、境界地域の状況や北方領土問題に関わる諸問題について多くを学びました。

ツアーは知床峠を越え、斜里町経由で中標津空港に向かいましたが、途中、路上で熊の親子に遭遇するなど、サプライズ満載の旅となりました。天気、案内者、料理、この三拍子がツアー成功のカギですが、ここまでパーフェクトな旅はあまり記憶がありません。今回のセミナーを組織してくださった標津町のみなさまと、40 名を超えるという想定外の人数となったグループを一人添乗でさばいてくださったビッグホリデー（株）には心よりお礼申し上げます。［岩下］

標津町文化ホールと国境地域各地をつなぐ

JIBSN セミナー 2023 の模様を YouTube 動画で公開しています。公開後約 1 か月で 4,000 回以上の視聴再生がありました。

UBRJ/EES 実社会のための共創研究セミナー「中東からみたウクライナ戦争」開催

2023 年 10 月 24 日、センターのクロスアポイントメント教員でもある黒木英充氏（東京外国語大学）によるセミナー「中東からみたウクライナ戦争」がオンラインで開催されました。残念なことですが、折しもパレスチナ自治区ガザ地区をめぐる緊張が高まり、社会的に高い関心を集めるテーマとなりました。セミナーの前半はウクライナ戦争を中心に、ウクライナ戦争における「認知戦」（偽情報の拡散や世論操作をはじめとする情報戦）に対する認識、「認知戦」下に生きる我々すべてに求められる自省への理解が必要となっていることが主張されました。また、氏は、ウクライナ戦争は避けられなかったのかという問いを立て、NATO 側の問題点を論じました。後半では、中東問題との比較が論じられ、ウクライナ戦争と 2003 年に始まるイラク戦争との類似性、パレスチナで行われている虐殺と難民の発生という現在進行形の問題を歴史的視点から考える必要性が検証されました。さらに、パレスチナ系アメリカ人研究者の意見を引用して、国際社会は全人類共通の基準にもとづき人権を侵害する者や法を破る者の責任を問うべきであるという主張には全面的に肯首させられました。ハマスによる大規模攻撃が行われた当日 10 月 7 日に南アフリカが発表したという声明の中で、国際

社会が積極的に行動を起こし紛争の公正かつ包括的な解決を求めることの重要性を表明しているという話がグローバルサウスの時代を考える上でも個人的には特に印象的でした。本セミナーの模様は YouTube 動画として公開され、公開後約 1 か月で 7,000 回を超える視聴がありました。［井上］

QR コードスキャナーで読み取りください。YouTube 動画としてセミナーの模様をご視聴できます。

アラスカにおける石油・ガス開発に関する現地調査

北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）社会文化課題では、経済学チームの 5 人のメンバーが 2023 年 8 月 28 日から 9 月 6 日にかけてアラスカのアンカレッジとノーススロープにおいて、石油・ガス開発とその地域経済・社会への影響に関する調査を行いました。

アラスカでは、1970 年代から北極海（ボーフォート海）沿岸のプルドーベイ（ノーススロープ郡）において原油採掘が行われており、アラスカを縦断するパイプラインを通じて南部の港から輸出されてきました。さらに現在では、ノーススロープで生産される天然ガスを、原油と同じようにパイプラインで、あるいはロシアのヤマル LNG と同じように北極海からタンカーで輸出するプロジェクトについて議論がなされています。いずれの案でも輸出先として想定されているのはアジアであり、石油・ガスの国際的な取引関係が 2022 年から大きく変わるなかで、日本に対する大きな期待感が感じられました。

アラスカでは、1971 年の「アラスカ先住民権益処理法」（Alaska Native Land Claims Settlement Act, ANCSA）により、土地に対する先住民の権利が放棄され、地域ごとに設立された地域会社（regional corporation）と各地域内の先住民部落ごとに設立された村落会社（village corporation）を通じて、先住民は土地や地下資源に対する権限や利益を享受することになりました。すべての地域会社と多くの村落会社は営利団体であり、石油企業はこれらの会社との契約に基づいて採掘を行っています。

日本の 4.6 倍ほどの面積を有するアラスカ州は広大であり、ノーススロープ郡だけでも本州を若干上回る広さです。同郡のなかには、連邦政府が所有するアラスカ国家石油保留地

（National Petroleum Reserve-Alaska, NPRA）や自然保護のために設けられているアラスカ北極野生生物国家保護区（Arctic National Wildlife Refuge, ANWR）も広がっており、地域会社の1つであるASRC（Arctic Slope Regional Corporation）はこの2つに挟まれる地域の一部を所有して開発を進めています。NPRAにおいては、我々が訪問している最中にも、バイデン政権がトランプ政権下で承認されていた石油・ガス採掘のリース契約をキャンセルするというニュースが報じられ、アラスカにおける資源開発と自然保護をめぐる議論は今も続いています。しかし、上述のような先住民を営利団体に取り込む仕組みによって、他の北極域でよく見られるように、先住民が自然保護を掲げて資源開発に反対する構図はあまり見られないということが今回の訪問でよく分かりました。

我々はまずアンカレッジで2日間にわたって開かれたアラスカ石油・ガス協会の年次総会に参加しました。市内最大のコンベンションセンターで開かれたこの総会には、石油・ガス企業関係者や州政府担当者など、約300名が参加したということでした。アラスカの石油・ガス開発の現状について、効率的に情報収集を行うことができました。アンカレッジでは、石油・ガスに加えて、漁業などの産業の専門家やアラスカ先住民連盟の幹部と話をすることができました。

ノーススロープ訪問は、キラクLNG社CEOのミード・トレッドウェル氏のアレンジにより、彼自身が引率する形で実現しました。2日間にわたって、いくつかの鉱区をめぐって、原油の掘削がおこなわれている施設や、エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC）も参加して行われているメタンハイドレートの開発・試験場など，通常は入れないところまで見せてもらうことができました。こうした生産施設が、見渡す限りに広がる北極域の大自然のなかに現れる風景が目に焼き付きました。

今回の現地調査を通じて、ロシアの北極域などと比べた場合のアラスカの特徴として、次の3点がよく分かりました。

第1に、アラスカには石油・ガス・石炭・レアメタルをはじめとして、広大な鉱物資源が賦存しており、開発のポテンシャルは極めて大きいということです。自然保護などを考慮して、非常に慎重に開発を進めているという印象があり、それによって、いわゆる乱開発が妨げられ、まだ資源がたくさん残っているということなのかもしれません。自然条件が厳しいだけでなく、自然保護のための開発の規制が厳しいので、余程の採算が見込まれないと、開発に踏み切らないということなのかもしれません。いずれの資源についても、どうやって運び出すかということが最大の課題です。

第2に、資源開発に関して、先住民との対立という構図はほとんど見られないということです。これには、上述のアラスカ法人モデルとも言われる先住民を営利団体に取り込む仕組みが寄与しています。ロシアなどと比べると、アラスカでは、先住民が雇用や所得など様々な面で開発の恩恵をはるかに多く享受しているように見受けられました。

第3に、地理的に近接することから、アラスカが日本やロシアを向いていることがよく分かりました。石油・ガスについてはもちろん、漁業や林業についても、供給国としてのロシアの動向や需要国としての日本の動向は、強く意識されているように思われました。換言すれば、日本は、資源供給先として、北極圏に位置するロシアだけでなく、アラスカとも強い結び付きがあることを今更ながら感じました。

最後になりましたが、今回の現地調査では、安仁屋賢所長をはじめとする在アンカレッジ領事事務所の方々とミード・トレッドウェル氏に大変お世話になったことを記して、あらためて感謝の意を表したいと思います。［田畑］

（左）北極海沿岸の原油採掘施設前にて　（右）パイプライン網のなかのカリブー
写真提供：ミード・トレッドウェル氏

2023年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定・滞在

2023 年度の中村・鈴川基金奨励研究員は以下の 3 名（五十音順）に決定しました。既に滞在して、充実した研究活動を行いました。［仙石］

岡部　克哉	慶應義塾大学大学院 法学研究科政治学専攻 後期博士課程	2023.8.6–8.19	辛亥革命対応をめぐる日露提携の実情	岩下
沖　隼斗	早稲田大学大学院　文学研究科 ロシア語ロシア文化コース 博士課程 2 年	2023.8.21–9.1	ボリス・ポプラフスキイの1930 年代の批評における「憐れみ」の概念と詩作との関係について	安達
村田　優樹	ウィーン大学東欧史研究所 博士課程 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（休学中）	2023.12.6–12.23	1919 年デニーキン白軍統治下ウクライナにおける民族問題	宇山

第 3 回百瀬フェローの決定

百瀬宏･津田塾大学名誉教授のご寄付に基づき設立された百瀬基金による､第３回百瀬フェローがこの度、決定しました。百瀬フェローシップは、スラブ・ユーラシア地域を研究するテニュアを目指しているポスドクの方を対象とした研究奨励制度です。このたびはセンターで慎重に審議した結果、沼田彩誉子さんに 2023 年 10 月より、百瀬フェローの称号が与えられることになりました。ひきつづき、多くの方々の応募をお待ちしています。［岩下］

選考講評

採択者：沼田　彩誉子（ぬまた　さよこ）

研究課題名：「タタール文化」とは何か：文化の正統性と国家、社会、移民、そして世代

沼田彩誉子氏の研究は、オーラルヒストリーの方法を使いながら、ロシア革命・内戦や飢餓から逃れ 20 世紀前半に東アジアで生まれたタタール移民 2 世と、20 世紀後半に再移住先のトルコ・米国で生まれたタタール移民 3 世の生き方の軌跡を丹念に意味づけるものである。それは、4 年間のトルコでの調査を含め米国、日本、英国、ロシアで 10 年以上、2 世を中心とする 75 名の関係者と重ねた対話に裏打ちされ、移住先の国家と社会、そして移民社会内部の世代間の関係など実に様々な角度からこれらの対話を解釈する点に特長がある。審査過程でも、氏の行動力と信頼構築能力、そして何よりも、人びとの語りに寄り添いながらそれを粘り強く分析し概念化する努力が高く評価された。スラヴ・ユーラシア地域においては、ウクライナ戦争に伴い、避難民や国外脱出の問題が新たな緊要性を持っている。ユーラシア大陸の激動の歴史の中でかき消されがちな普通の人びとの声を拾い上げ、地域と世界を考える方法に新たな地平を開くことを沼田氏に期待したい。

採用にあたっての抱負

沼田　彩誉子

第 3 回百瀬フェローの沼田彩誉子と申します。このような機会を頂戴し、身に余る光栄に存じます。審査員の先生方をはじめ、関係する皆様方に心より御礼申し上げます。

私は、オーラルヒストリーと移民研究の枠組みから、移民の経験に関心を寄せています。特に、ロシア革命後にヴォルガ・ウラル地域を離れ、東アジア、トルコ、アメリカと世界規模の移動を繰り返したテュルク系ムスリムを「タタール移民」と呼んで、インタビューを行ってまいりました。博士論文では語りにもとづき、20 世紀前半の旧満洲、朝鮮半島、日本で誕生した第 2 世代にとって、「故郷」とは何かを考察しました。

移民の経験をめぐる研究を、事例提供を超えた議論へと開いていくには、移民だけを一方的に取り上げるのではなく、受け入れ社会や研究する側のあり方を含めて問い直すことが必要だと考えています。そこで、協会名に用いられ、語りでも言及される「タタール文化」を題材に、文化の正統性をめぐる権力関係の解明を、百瀬フェローとして取り組む課題といたしました。

ここでの目的は、タタール文化なるものを本質主義的に定義することではありません。第 2 世代および再移住先のトルコ・アメリカで誕生した第 3 世代が、タタール文化の名のもとに何を指し示し、自己の人生に位置づけているのか、その際、「ナショナルに区分化された空間の管理者」である定住者と、「管理すべき対象」とされる移民の間に横たわる非対称性が（伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う』有信堂、2007 年）、いかに日々の生活における文化の実践に影響を及ぼすのかを明らかにすることを目指しています。

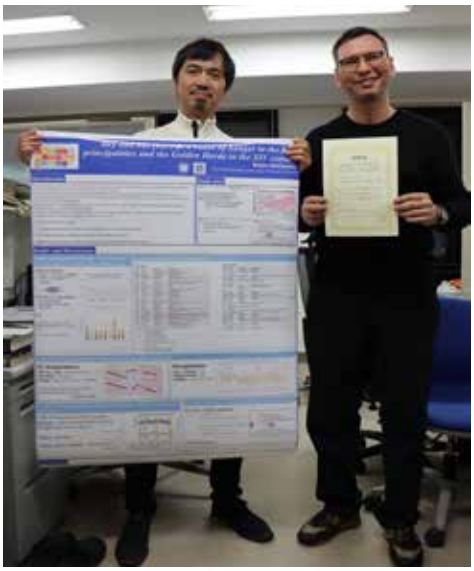
タタルスタン共和国だけではなく、東アジアを経由した本研究課題の主役たちをはじめ、中央アジアやバルト海地域などタタール人は世界各地に暮らしています。文化が関係性のなかで構築されることを鑑みれば、タタール文化もまた一枚岩と言うことはできず、タタール人というカテゴリー内部および世代間の類似と相違について、各社会との連関を踏まえた比較検討の一助となるよう努める所存です。

トルコ・アメリカの移民の世界からスラブ・ユーラシアを眼差してまいりましたが、センターの皆様の薫陶を賜り、自身の認識を再点検できれば幸甚です。10 月より 1 年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

博士研究員のシャクマトフ・ルスランさんが
第 9 回北大・部局横断シンポジウムでベストポスター賞を受賞

博士研究員のシャクマトフ・ルスランさん（科学研究費基盤研究 S「ミレニアム大気再解析プロダクトの創出」研究代表者：芳村圭教授（東京大学）での雇用）が、2023 年 10 月 11 日に開催された第 9 回北大・部局横断シンポジウムでポスター発表を行い、ベスト・ポスター賞に選ばれました。

受賞ポスター “Dry and Wet Years as a Cause of Hunger in the Rus’ Principalities and the Golden Horde in the XIV Century” は、今年度の夏期国際シンポジウム「崩壊の局面：アフロ・ユーラシアから「14 世紀の危機」を思考する」での報告を基にしたものであり、スラブ・ユーラシア研究センターが志向する文理協働研究の成果の 1 つです。［諫早］



シャクマトフさん（右）と受賞ポスター

専任研究員セミナー

専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

2023 年 11 月 2 日　野町素己

報告：The Early Nikita Il’ič Tolstoj as a Macedonist

コメンテータ：Christina Elizabeth Kramer（トロント大学）

このペーパーは、ソ連のスラブ語学者、サムイル・ベルンシュテインのカシュブ・マケドニア語研究に関連するもので、その研究を進める過程で報告者はベルンシュテインの弟子にあたる言語学者ニキータ・トルストイの手稿を未亡人のスベトラーナ・トルスタヤ教授の好意により参照することができました。それにもとづき執筆された本論は日本人で唯一トルストイ記念論集 Слово и человек: к 100-летию со дня рождения академика Никиты Толстого (Индрик, 2023) に招待され、すでに公刊されていますが、マケドニア科学芸術アカデミーからの依頼によるマケドニア語訳の出版に際して増補改訂される予定です。

スラブ言語学の分野で 20 世紀におけるもっともすぐれた研究者のひとりとして、語彙の歴史的・類型論的研究、スラブ標準語とその歴史、民族言語学における成果で知られるトルストイですが、その関心ははるかに広いものでした。マケドニア語の専門家としてはほとんど知られていませんが、実はそのキャリア初期にはマケドニア語研究に取り組んでいて、『マケドニア・ロシア語辞典』(1963 年)の編集責任者を務めたほか、『ソ連大百科事典』の項目「マケドニア語」を 1954 年に匿名で執筆しています。モスクワ大学でベルンシュテインの指導下にブルガリア語を研究していたトルストイは、師の勧めによりマケドニア語の研究を始めたと思われますが、その第二の研究成果となった学位論文で前置詞 od を取り上げています。この分析は初めてマケドニア語のシンタクスを統一的に描写した重要な達成でした。本論はトルストイ家のアーカイブに保存されていたこの未刊行の学位論文をおもな分析対象としています。

それまでのマケドニア語研究は方言研究としてとくに音声面に焦点があたっていて、シンタクスはほぼ研究されていませんでした。1950 年にマール言語学から解放されると、ソ連のスラブ言語学者たちはスラブ語の歴史的研究の復活の過程で理論的展開が不十分であったシンタクスの分析に取り組みます。トルストイの学位論文はこの潮流に先駆けるもので、標準語形成から時間が経っておらず、分析に使える現地出版物がなく、研究自体が十分に行われていないマケドニア語を扱ったことも画期的でした。当時はマール主義による制約があったほか、スターリンとチトーの対立によりソ連ではマケドニア語研究そのものが困難で、現地で刊行された資料はまったく使えないためにブルガリアで刊行されていたプロパガンダ紙を主要な分析対象としなければなりませんでした。

学位論文ではヴィノグラードフのロシア語の分類モデルを応用しながら、従来不十分だった前置詞の分析が行われます。まず、先行研究が前置詞を意味論と文法のいずれかのカテゴリーに分類していたのに対し、一般言語学にもとづいて両者のあいだに位置する混合的な存在だとする重要な指摘が行われました。そしてマケドニア語の前置詞 od を多義的として、その意味構造を 8 個に分類、そのそれぞれが動詞的・非動詞的という二つのサブカテゴリーにさらに下位分類されます。これはそれまでの研究とは異なり、通時・共時の両面でよく組織されたロジカルなものでした。西部マケドニア方言における所有を意味する od の出現を格の消滅に附随するものだとしながら、(バルカン基層言語の存在を前提していたにもかかわらず)隣接言語の影響の可能性を認めています。

トルストイの学位論文は類型論的に非常に近いバルカンのスラブ諸言語の比較という点でベルンシュテインの関心を惹き、とくに第二章における前置詞の意味論の分析は肯定的に評価されました。指導教員からは率直な批判もなされましたが、トルストイの研究とそれに対するベルンシュテインの応答は、困難や制約にかかわらず、od と na の意味論的違いなど後のバルカンのスラブ言語学の論点を先取りするものだったと本論は総括しています。

コメンテータはクリスティナ・クレイマー氏が務めました。トロント大学の名誉教授をされており、マケドニア語研究の世界的権威、著名なスラブ語学者であり、センターの生存戦略研究の招へいによって来日中でした。コメントではこれまでの野町研究員の研究とスラブ言語学への貢献を概観したうえで、言語ナショナリズムの問題を扱うとともにアーカイブ資料も活用する今回のペーパーを、その延長線上にあって幅広いコンテクストを扱うものとして高く評価しました。さらに、トルストイが若くしてマケドニア語辞典の編纂者に選ばれ

た事情や、ブルガリア語標準文法を推進する言語学者との論争をはじめとするマケドニア語の標準語化をめぐる当時の状況、ポテブニャ、ヤコブソンをはじめとする構造主義の言語学者、1952 年に世界で初めてマケドニア語標準語文法を刊行したアメリカ人研究者ホレイス・ラントといった代表的な言語学者たちとの関係、言語の定義をめぐる困難など、多岐にわたる質問やコメントがなされ、報告者とのあいだで熱心な議論が行われました。

出席者からは、トルストイのマケドニア語研究をめぐる冷戦フレームについて詳細を尋ねる質問や、その研究に当時のユーゴ・ブルガリア・ギリシア間の関係が影響した可能性、トルストイのパルチザン参加についてなど、歴史的な文脈を問う質問が多くあったほか、マケドニア語に注目が集まっていた背景、バルカン言語学のソ連における受容、シンタクス研究と言語学におけるナショナリズム的な傾向との関係などに関心が寄せられました。セミナーは、言語学だけではなく歴史・政治に関係する本ペーパーの研究手法をめぐる熱心な議論で幕を閉じました。［安達］

2023 年 11 月 22 日　長縄宣博

報 告：Back to the Future: Möhämmäd Zahir Bigiev and His Journey to Bukhara in the Age of Steam and Print

コメンテータ：木村暁（東京外国語大学）

このペーパーは長縄研究員自身が 2019 年冬に組織したセンターの国際シンポジウム（帝政ロシアの地方再訪：文学的想像力と地政学）での報告を基にしたもので、関連する英語論集に収録される予定です。1870 年代から 1930 年代にかけて蒸気機関と印刷がムスリムの時間と空間に対する認識に変容をもたらしたとする先行研究を踏まえ、トルキスタンの征服とロシア帝国への編入を背景に、ブハラへとドンから旅したタタール人ムスリムのビギエフの旅行記『マーワラーアンナフル紀行』を題材として、産業の進展と時空間の認識の変容、ムスリムの主体性の関係が分析されます。まず 19 世紀末に増加したタタール人による西へ向かう旅行記、とくにオデッサやクリミアを出発点とする巡礼記と比較され、前者が歴史的時間の前進の感覚を与えるのに対し、ビギエフの著作における「東への旅」は過去の省察へとつながっていることが指摘されます。次に、同じく東方への旅を行ったロシア人ウフトムスキーの旅行記との比較が行われます。ザカスピ地方やマーワラーアンナフルといった帝国の新たな周縁の現状に触れることで、両者は地域の過去の記憶を思い起こし、それが自分たちの宗教、ネーション、帝国の未来について思いを巡らす機会になっています。両者はともに征服された中央アジアの産業化に感銘を受けていて、この点でビギエフは改革派のジャディードの思想に近いように思われますが、ロシアによっては制御不能なこの地域の現象については両者の見解が異なります。ウフトムスキーがテクノロジーによって「ムスリム世界」の統一が助長され、結果としてロシアの国家としての威信が内部から損なわれることを憂慮するのに対し、ビギエフは、ブハラやロシア内のムスリムがイスラム教の初期の理解から逸脱していることだけでなく、ロシア支配下での道徳の衰退やムスリムに対する抑圧といった植民地状況に対しても批判的な見解を述べています。歴史的著名人の墓を訪れたり、ムスリム世界の退化を感じている点ではマディーナの学者サイイド・アリーと共通してもいるため、ジャディードとカディーム（保守派）の二分法による従来の研究ではビギエフの旅行記は理解できないことが主張されます。遠隔地の出来事を真実味と信ぴょう性をもって伝えること

で権威を生み出す旅行記は、20 世紀初頭のタタールの公共圏でムスリムの主体性を明示する重要な手段となりましたが、ビギエフの旅行記は蒸気と印刷の時代におけるムスリムの公的権威の分裂を映し出し、増幅させたのだと結論づけられます。

コメンテータからは、非常に丁寧な読解がなされるとともに、「未来への回帰」、東西への空間移動と過去への時間的移動の関係、ジャディードとカディーム（保守派）の二分法といった論文の基本概念に対する議論が提出され、これらの問題については出席者からも質問がありました。また「グレート・ゲーム」を戦うイギリス側の旅人の視点、ブハラ側で蒸気・印刷行政を主導した一人であるイラン人官僚、ムスリム社会の悪弊を外部から観察する異邦人／旅行者の伝統などについて重要な情報提供が行われました。

出席者からはほかにも蒸気と印刷の関係、中央アジアとタタールの関係、旅行記の書き手とジャンルの関係、仏教徒との比較、ビギエフの思想の「多孔性」という概念などについて本質的な質問がなされ、広がりのある豊かな議論が行われました。［安達］

研究会活動

センターニュース 169 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。［編集部］

8 月 22 日　中村・鈴川基金奨励研究員報告会　沖隼斗（早稲田大学大学院文学研究科博士課程）「憐れみと声調：1930 年代のボリス・ポプラフスキイの批評と詩作」

9 月 21 日　北海道中央ユーラシア研究会第 145 回例会　鈴木朝香（東京大学大学院学際情報学府修士課程）「権威主義国家における表現の自由の侵害：トルクメニスタン政府による情報統制の現状」

9 月 29 日　科研プロジェクト　「ロシア・中東欧のエコクリティシズム」講演会　Tintti Klapuri (University of Helsinki) “Russia’s Arctic Indigenous Literatures in Ecocritical and Postcolonial Perspective”

9 月 30 日　科研シンポジウム　「スラヴ文化の森：環境批評の視点から」阿部賢一（東京大学）、越野剛（慶応義塾大学）、菅原祥（京都産業大学）、松前もゆる（早稲田大学）

10 月 10 日　International Workshop “Colonial and Postcolonial in Recent History of Central Asia” Session 1: Soviet development policies and socialists plan in Central Asia; Irina Morozova (University of Regensburg / SRC) “Diffusion of the Postcolonial: Reform in “Domestic Central Asia” in Relation to Soviet Policy in the “Foreign Orient” (the 1970–80s)”; Isaac Scarborough (Leiden University) “Reconsidering and Recalculating Soviet “Subsidies”: Financial Transfers to the Tajik SSR in the 1970s and 1980s”; Tetsuro Chida (Nagoya University of Foreign Studies) “Scaling Down in Resolving Environmental Problems? The Decline of Gigantomania in the Soviet Union and the Aral Sea

Crisis"; Session 2: Cultural production and historical memory in late Soviet and independent Central Asia; Akira Matsumoto (Hokkaido University) "Was the "Kyrgyz Miracle" a Product of Chance? The Self-Representation of the Kyrgyz in the Film *Manaschi* (1965)"; Elmira Nogoibaeva (Center Polis Asia, Esimde Research Platform, Kyrgyzstan) "Memories of *Urkun* in 1916: De/anti-colonial Echo"; Alima Bissenova (Nazarbayev University) ""The Man with the Character of Horse": The Narratives of the Revival of Horse Herding and *Kokpar* in Kazakhstan"

10 月 11 日　第 46 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　大西富士夫（北海道大学北極域研究センター / SRC）「北極域をめぐる地政学：資源、アイデンティティ、戦争」

10 月 13 日　国立大学附置研究所・センター会議 第 3 部会（人文・社会科学系）シンポジウム　「危機の世紀」 諫早庸一 (SRC)「14 世紀の危機の語り方：ヨーロッパ到来以前の黒死病」、中島楽章（九州大学）「15 世紀の危機と 17 世紀の危機：東アジアを中心に」、長縄宣博（SRC）「長い 20 世紀の終焉」

10 月 16 日 –11 月 10 日　2023 年度 公開講座　「どうなる？ どうする？ 日露関係」 服部倫卓（SRC）「日露ビジネスは退くも残るも茨の道」、濱田武士（北海学園大学）「重大な岐路に立たされる日露漁業外交」、鴻野わか菜（早稲田大学）「日露文化交流：アートを通じた国際理解と地域創生」、小泉悠（東京大学）「ロシアから見た極東の軍事的位置付け：2030 年代の極東ロシア軍を考える」、駒木明義（朝日新聞論説委員）「日露関係の現在位置:安倍・プーチン交渉が残したもの」、岩下明裕（SRC）「国際関係と地政治のなかの日露関係」、原田大輔（エネルギー・金属鉱物資源機構）「日露エネルギー協力の再評価と見直し：ウクライナ危機とカーボンニュートラルの試練」

10 月 18 日　Survival Strategies Seminar　Sabine Dullin (Institut d'études politiques de Paris Centre d'histoire de Sciences Po) "The Sovereignty to Survive and Decolonize: The Republic of Yakutia-Sakha in the Face of Soviet Collapse, 1980s–1990s"

10 月 21 日　JIBSN セミナー 2023（標津町）「境界地域の移住と観光を考える」 セッション I「移住」: 久保実（五島市）、蔵部晃一（礼文町）、伊賀敏治（対馬市）、西山一也（標津町）、渋谷正昭（小笠原村長）；セッション II「観光」: 川野忠司（稚内市）、竹本勝哉（根室市）、田島忠幸（与那国町）、高橋優人（竹富町）

10 月 24 日　UBRJ/EES 実社会共創セミナー　黒木英充（東京外国語大学／ SRC）「中東からみたウクライナ戦争」

10 月 25 日　科研研究会（東京）　Asel Doolotkeldieva (George Washington University), Stefanie Ortmann (University of Sussex) "Geopolitics from below in Central Asia at the time of invasion of Ukraine"

10 月 26 日　特別講義 「ウクライナ戦争と地政学」 Mykola Riabchuk (Institute of Political and Ethnic Studies, Academy of Sciences of Ukraine / SRC) “A Return of Geopolitics? Russian War in Ukraine and the Prospects for the New Global Order”

10 月 30 日　北海道大学イスラミック文化研究会セミナー 「パレスチナの近代史」 黒木英充（東京外国語大学）、猫塚義夫（北海道パレスチナ医療サービス創設者 医師）

10 月 31 日　第 26 回北海道大学・ソウル国立大学ジョイントシンポジウム “Towards Sustainable Development of Slavic-Eurasian Studies in Northeast Asia during Crises” Session 1: Slavic-Eurasian Studies in War and Peace: Achievements and Prospects; David Wolff (SRC) “The New Map of Ukraine and its Effect on Slavic-Eurasian Studies”; Eunji Song (Seoul National University) “An Overview of Curriculum in the Russian Humanities Program at the Major Korean Universities and a Brief Prospect for the Post-war Period”; Daisuke Adachi (SRC) “Slavic Literature and Culture Studies in Japan and SRC after Russia’s Invasion of Ukraine”; Youkyoung Hwang (Seoul National University) “Vladimir Mayakovsky and War”; Session 2: The Russo-Ukrainian War: Perspectives from the Humanities and Social Sciences; Jong Hyeon Lee (Seoul National University) “The Poetics of Enmity: Reading “ПоэZия русского лета ”(2023)”; Mirlan Bektursun (SRC) “The Russo-Ukrainian War: Has the War Changed Something in Russian and Central Asian Asymmetrical Relations?”; Sun Yung Park (Seoul National University) “The Fate of Russian Artists after the Russo-Ukrainian War: On the So-called “Culture Steamer (kul’turnyj parokhod)””; Toru Nagashima (Hokkaido University) “Expanding the Boundaries of the People: Russia’s War on Ukraine from the Perspective of Citizenship”

10 月 31 日・11 月 1 日　SRC Seminar（京都・東京） “Problem of Literary Translation: A Case of Macedonian Literature” Christina E. Kramer (University of Toronto) “Sound and Sense in Literary Translation”, “Look Both Ways: Carrying Literatuire and Poetry from one language to another”

11 月 5 日　特別講演会 小林文乃（作家）「『カティンの森のヤニナ』の著者・小林文乃さんによるトークショー」

11 月 8 日　生存戦略研究セミナー（東京） 「将来のロシアのかたち」 Ildus Gubaidullovich Ilishev (Independent Scholar, Deputy Prime-Minister of the Republic of Bashkortostan, Russia (2005–2010), Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary (Ret.) / SRC) “How Russia Will Look Like After the War in Ukraine: Possible Scenarios for its Future”

11 月 9 日　講演会（東京） 「多難な時代のロシア・サウジ関係」 Ildus Gubaidullovich Ilishev (Independent Scholar, Deputy Prime-Minister of the Republic of Bashkortostan, Russia (2005–2010), Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary (Ret.) / SRC) “Russia-Saudi Arabia: A Transactional Relationship Amid Constraining Realities”

11 月 13 日　SRC Seminar　Marek Łaziński (University of Warsaw) “Verbal Aspect in Law Texts in Polish and Other Slavic Languages. Linguistic and Legal Interpretations”

11 月 14 日　SRC Seminar　ウクライナ文学の夕べ(詩の朗読)　Natalka Bilotserkivets (Poet), Mykola Riabchuk (Honorary president, PEN Ukraine / SRC) “Ukrainian Literature Today: Is It a Time for Poetry during the War?”

11 月 15 日　UBRJ ／ EES 実社会のための共創研究セミナー　「難民と日本社会」　大茂矢由佳（埼玉大学）「『難民』は日本でどう受け止められたか：インドシナ難民からウクライナ避難民まで」

11 月 22 日　SRC Seminar　Daniel Poch (University of Hong Kong / Waseda University) “Licentious Fictions: Ninjō and the Nineteenth-Century Japanese Novel”

11 月 26 日　SRC Ukrainian Seminar（神戸）　第 1 部 : Mykola Riabchuk (Institute of Political and Ethnic Studies, Academy of Sciences of Ukraine / SRC) “Toxic Spell of ‘Imperial Knowledge’ and Challenges of Decolonization”; 第 2 部 : Natalka Bilotserkivets (Poet), Poetry reading in Ukrainian with English translation

11 月 27 日　SRC ／ ISLSASA 共催「学士院会員ミルカ・イビッチ追懐：その営為と学術的遺産」　第 1 部「学士院会員ミルカ・イビッチと外国人研究者との交流」ウェイルズ・ブラウン（コーネル大学、米国）、中島由美（一橋大学）、野町素己（北海道大学）；第 2 部「学士院会員ミルカ・イビッチとセルビア語研究所」ソフィヤ・ミロラドビッチ（セルビア語研究所、セルビア）、スレト・タナシッチ（セルビア語研究所、セルビア）、ラダ・スティヨビッチ（セルビア語研究所、セルビア）；第 3 部「学士院会員ミルカ・イビッチの学術的遺産と現代言語学」ミリボイ・アラノビッチ（ノビサド大学、セルビア）、岡野要（神戸外国語大学）、アレクサンドラ・マルコビッチ（セルビア語研究所、セルビア）[“Сећање на академика Милку Ивић: делање и научио наслеђе” Секција прва: Сећање на акад. М. Ивић и њену сарадњу са иностраним колегама; Проф. др Вејлз Браун (Универзитет Корнел), Проф.Јуми Накађима (Универзитет Хитоцубаши), Проф. др Мотоки Номаћи (Универзитет Хокаидо); Секција друга: Научна делатност акад. М. Ивић везана за Институт за српски језик САНУ; Проф. др Софија Милорадовић (Институт за српски језик САНУ), Акад. Срето Танасић (Институт за српски језик САНУ / АНУРС), Проф. др Рада Стијовић (Инсгитут за српски језик САНУ); Секција трећа: Импликација научних тема акад. М. Ивић у савременој лингвистици; Проф. др Миливој Алановић (Универзитет у Новом Саду), Доц. др Канаме Окано (Универзитет за стране језике у граду Кобеу), Др Александра Марковић (Институт за српски језик САНУ)]

11 月 30 日　SRC Ukrainian Seminar（東京）　Mykola Riabchuk (Institute of Political and Ethnic Studies, Academy of Sciences of Ukraine / SRC) “Rallying Around the Flag: The War Challenges and Civic Mobilization in Ukraine”

11 月 29 日・12 月 1 日　連続講演会（札幌・神戸） Yovka Tisheva (Sofia University, St. Kliment Ohridski) Lecture 1. “Bulgarian Sign Language: History and Linguistic Features”; Lecture 2. “Spoken Bulgarian in the Globalized World”

12 月 1 日　Survival Strategies Seminar Ildus Gubaidullovich Ilishev (Independent Scholar, Deputy Prime-Minister of the Republic of Bashkortostan, Russia (2005–2010), Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary (Ret.) / SRC) “A Regional Profile of Decaying Russia: The Case of the Republic of Bashkortostan”

12 月 2 日　SRC Ukrainian Seminar（東京） Mykola Riabchuk (Institute of Political and Ethnic Studies, Academy of Sciences of Ukraine / SRC), Natalka Bilotserkivets (Poet) “Actuality of Literature in the Age of Crisis: Expressing Poetry as Voice”

12 月 3 日　Workshop（東京） “Different Perspectives in Minority Language Studies: The Case of Slavic Speaking Areas” Yovka Tisheva (Sofia University, St. Kliment Ohridski), Mihailo Feisa (University of Novi Sad), Kaname Okano (Kobe City University of Foreign Studies), Ken Sasahara (Reitaku University)

人事の動き

事務職員の異動

児島　和子　事務補助員　2023 年 10 月 1 日採用

第１回　マトリョーシカ・インタビュー

田畑 伸一郎　名誉教授

SRC の研究員に自身の研究や SRC への思いについて聞き出すインタビュー。マトリョーシカのように研究員の少し内側の姿に迫るコーナーを目指します。

記念すべき第１回目は、スラブ・ユーラシア研究センターに 40 年近く勤務され今年３月に定年退職された田畑伸一郎名誉教授にお話しを伺いました。

ウクライナ侵攻と今後のロシア

―田畑先生は 40 年近くスラ研に勤務されて、2023 年３月末に定年退職を迎えられました。その３月には「ポスト・プーチンのロシア：経済をどう立て直すか？」というタイトルで最終講義をされています。研究者生活の総括や最後を飾るといった趣ではなく、社会にメッセージを投げかけるスタイルをとっていますが、これはどういった思いで臨まれたのでしょうか。

そういうことも考えたんですけどね。とはいえそれで聞き手が面白いだろうかと思ったのが一つ。もう一つは公開講演会を兼ねていたので、聞き手に何かを持ち帰ってもらえるような話の方がいいのかなと思ったのもあり、そういう方向はやめました。

あとは、ウクライナ侵攻が起こってからの去年１年間は、ロシアに対する経済制裁の話を各所でたくさん話してきました。そうした中では話す方も聞いている方も、経済制裁の効果が出てロシアが痛みを覚えてウクライナの戦争を早く終わらせてくれればいいという期待感で聞くわけです。経済制裁は効いた方が良くて、ロシアが痛みを覚えるような、そういう方向であればいいという調子で話すし、それを期待して聞くという状況ですね。それが１年も続いたので、もう少しその先を見た話しをしてみたいなというのも一つありました。ロシアが悪くなればなるほど我々の利益だという話ではなくて、その後ロシアがどうなっていくのかという話の方が少し前向きな話になるのかなと考えました。

―それほどまでに、ここ１年間は戦争をめぐっての暗い現状について話を求められてきたということでしょうか。

私たちロシア研究者にとって、２月 23 日のウクライナ侵攻はものすごくショックでしたよ。私がスラ研に赴任してから、ソ連崩壊という事象はありましたが、それとは比べ物にならないですね。普通に考えるならば起き得ない、ああいったことをするとはとても思えなかったので、本当にショックで。この１年はそれをずっと引きずったような年でしたね。

―その地域と築いてきた信頼みたいなものが崩されたショックでしょうか。

例えば、よく言われる議論として日ロ関係における政経分離があります。経済関係が良くなれば政治関係が良くなって北方領土が戻るとかいう話がずっとあって、私は経済関係が進

んだからといって北方領土が戻るなんてことはないという立場ですが、経済関係が良くなって両国関係がマイナスになることはない。経済関係が密になれば人の往来・交流が増えて、お互いの国を良く知るような人が増えていくわけです。そういう意味では、経済的には 90 年代に底を見たロシアが 2000 年代以降プーチン政権になって相当回復して、日ロ関係も貿易の面ではすごく活発になり、人的な交流も増えたわけですよね。そうした中でああいうことが起きるというのは考えられなかったですね。

現に、北大はロシアとの大学間交流の代表校として熱心にやっていましたから。極東の 5 つの大学から短期で年間約 25 人を日本に呼んで、そのうち約 10 人は半年ほど北大に滞在し、日本からも同様の規模で派遣してきました。こういった規模の大きな交流をやっている中でしたから。また、個人的にはロシアに行けなくなってしまいました。ここ 7・8 年行っている北極関係の共同研究では現地調査が欠かせないところ、結局 5 年間ロシアに行けないで終わりそうです。こんなことってあるのかという感じですね。

文系の北極研究の開拓者として

—まさに次に ArCS II（北極域研究加速プロジェクト）の話を伺いたいと思っていました。ArCS II は全体としては理系のプロジェクトかと思いますが、その中で先生は経済という立場から協働研究をされています。国としても文理融合型のプロジェクトを強化しようという流れがある中で、先生の研究はまさにそれかと思いますが、文理融合という観点での難しさ、だからこその醍醐味は何でしょうか?

それは話し出したら尽きない話題ですね。今実施されているのは ArCSII（2020–2025 年）ですが、前身として ArCS（2015–2020 年）があります。ArCS が始まった時というのは、北極域研究に初めて文系が入った時なんです。それまでも自然科学の立場から海や陸を観測する国家プロジェクトとしての北極域研究はありましたが、2015 年に ArCS ができるまではそこに文系研究は全然入っていなかった。その時に私は文系の代表を務めました。この本（写真 1）のタイトル（北極の人間と社会—持続的発展の可能性）がまさにプロジェクトのタイトルで , その時はなかなか大変でしたね。全部で 8 つの研究プロジェクトがある中で、文系のプロジェクトは 1 つ。あとは全部理系です。そうした中で行う会議は大変でしたね。やはり理解が全然違うんですよ。例えば、理系の研究者に安全保障の話題を振ってもその重要性を共有できませんでした。安全保障研究といえば国際関係の研究

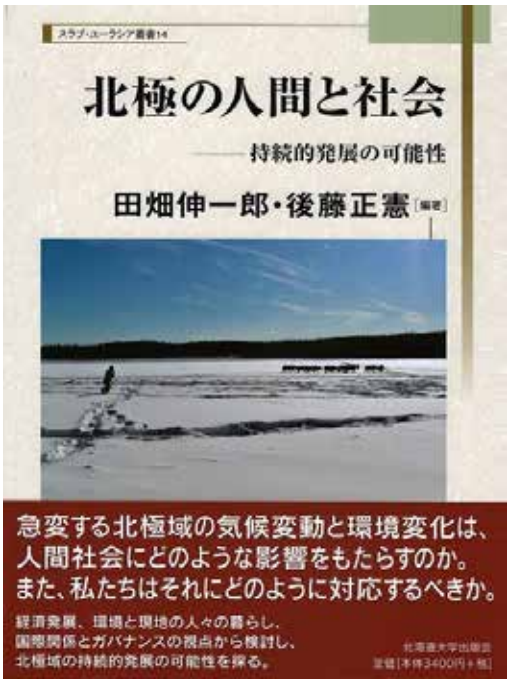


写真 1

を行う上では必然的に射程に入ってくるものですが、ArCS が始まってすぐの時に安全保障という内容を含むセミナーをスラ研で実施しようとしたら、「安全保障など計画中のどこにも書いてない。そうしたものを ArCS で扱うとはどういうことか」という質問が出てくるわけです。その他にも色々ありましたね。それでも、そういったことを 5 年間積み重ねてお互いに相当分かり合えるようになったと思いますよ。そもそもなぜ ArCS の時に文系が初めて入ったかといえば、世界的には北極研究に文系が入るのは当たり前だったわけです。国際的な北極域の研究をやる上では、他の国だと国際法学者だとか先住民を扱う文化人類学者だとか、そういう文系の人たちが 2 割ほど入っているのが普通ですから。そういう事情もあって日本も、という趣旨だったかと思います。その点は、最初の ArCS の時にある程度理解してもらえたのではないかという気はしましたね。ArCSII になってからは国際法、国際政治、文化人類学など文系の研究者も一気に増えました。やはり最初の 5 年間は有意義だったんだと思います。

ーまさに礎ですね。

もっと言えば、文理融合という話ではスラ研はもっと前から環オホーツク海の環境についての研究を低温研の方々と一緒に 2000 年代の中頃から始めています（写真 2）。その時にも一応文理融合というのを看板にしていました。今でも ArCS の中に低温研の人がたくさん参加していて、当時に一緒に研究した人と現在も一緒にやっていたりするわけです。

ちょっと文理融合について別の話をすると、私がやっていることはまだ文理連携ぐらいのようにも思います。お互い一緒に報告を聞き合う等はありますが、融合といえるような、一つの論文を共著で書くとかそういったことはこれまでやっていません。本を一緒に出すとか国際シンポを一緒にやるとか「連携」はやってきたけれども、「融合」となると何が融合なのか、私にはまだわからないところがあります。文化人類学の研究者が環境のモニタリングをやっている研究者と一緒に論文を書いている例はあるので、そうした分野ではうまく融合しやすいのかもしれませんが。とはいえ論文を共著で書くというのが無ければ融合と言わないかどうかもわからないですけどね。

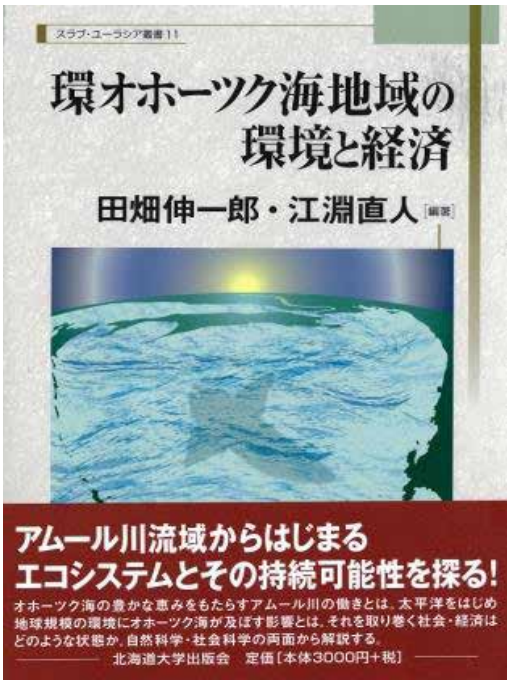


写真 2

―融合の意味もやはり分野によって違うんでしょうか。

そういう気もしますね。環オホーツク海研究での実感からすれば、一緒に研究会をやって、

お互いの報告聞くだけでも意味はあると思います。ただ、そこから先に踏み出していくのは分野によって違いがあるでしょうね。もっと若い人だったらできるのかもしれませんが。

―余談で恐縮ですが、私の修士時代の指導教員が ArCS Ⅱの国際法プロジェクトに入っている柴田先生なんです。

え、そうでしたか。だったら話が早い。ArCS の時の文系グループは一つしかなかったので柴田さん（神戸大）も私のグループの中で一緒にやっていましたよ。ArCSII では国際法は別建てになったんで、独立していろんなことやってますよね。ArCSII では文系グループは大きくなりましたから。あの先生が立派だと思うのは、文系の北極研究の弟子を育てているところですね。神戸大と東北大の北東アジア研究センターではそうした弟子が育っています。

スラ研は中核として日本をリードする研究を

―次に、先生は歴代で 2 回センター長に就任されています。スラブ・ユーラシアをめぐって世界情勢が目まぐるしく変化する中、当センターの役割や今後目指す姿について先生のお考えはいかがでしょうか。

私が来た時から、元々スラ研はソ連・東欧の研究センターだったわけで、そうした存在はずっと日本で一つしかないものですから、これからもこの分野でリードしていく存在であるべきだと思います。ただ、スラ研は小さいわけで、10 人ほどの研究者でソ連東欧地域そして各分野をカバーしてそれらをリードしようとしても、スラ研だけではできません。ですから日本中のそうした研究を組織する中核的なセンターであり続ける、それがスラ研の宿命・役割なんだろうと思いますね。北極研究だって、ある人が飲み会の席の雑談で「北極研究はやっぱりスラ研がリードしてやらなきゃダメですよね」ってふと言ったんです。それで私もふと「うん、そうか」という気になって。実は ArCS をやる前から北極研究はやっていて、文科省が実施していたフィンランドとの二国間交流事業で北極をテーマに研究をしていました。さらにその前には、住友財団の基金をもらって研究をやっていて、それが一番初めでした。それに応募するきっかけが今言ったエピソードです。そこから現在の研究まで、実は私の中で全部繋がっています。スラ研の役割ってそういうことなのかなと思いますね。小さいから何もかも自分でできるわけじゃないし。

―核ではあるけれども、広がりをもった存在であって、連携して巻き込んでいくといったような。

そうですね。今から 40 年前だと、国際シンポをこの分野でやっていたのはスラ研くらいで、極端に言えばスラ研にきて初めてこの分野の外国人研究者と話をするとか、外国語で発表するとか、そういう時代だったわけですね。そういう国際的な繋がりにしても、北極研究にしても、他の人が、日本の人たちが見てないような一歩先に行ってみるという役割があるのかもしれないですね。

北極だって、文科省は北極研究には大きなお金をつけてくれる一方で、ロシア研究にはあまりお金つけてくれないわけですよね。時の政権下で日ロ経済が拡大していた折、スラ研が大規模なロシア研究をしたいという提案を持って行ったことがあったんですが、この時すら通りませんでした。だったら北極研究として一生懸命やればいいと思いながらここ 10 年近

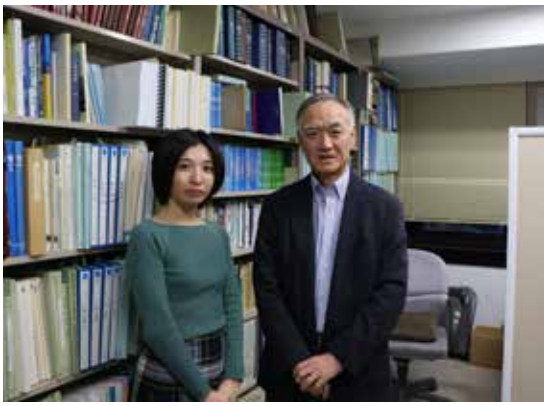
くやってるような感じですかね。北極の経済とか言いながら中身はロシア経済だったりするわけですから。

―そこはある意味で強かに。

強かにやらないと。文系の北極研究はロシアなしでは成り立たないですからね。北極の中ではロシアがすごく大きな位置を占めていますから。私から言わせればスラ研はもっと北極研究をやっていいと思っています。とはいえ、日本でロシア経済研究を志す若い人がなかなか少ないから、北極研究も同じ問題を抱えています。

―若い世代のことを先生は気にされているのでしょうか。

とにかくロシア経済研究は危機だと思います。本当に若い人がいないです。そこは非常に危機感を感じますね。夏にスラ研でサマースクールをやっているのも、そこを何とかしたいが故の取組の一環で、色々な形でやっていくべきかと思いますね。東北大の高倉さんは高校生向けに公開講座やオンライン講座を始めるそうですけど、それくらいのことをやっていかないと先細りするのかなという気はします。柴田さんにしても高倉さんにしても、上手いことやってるなと思うのが、別に北極とか南極とかあまり興味ない人もそっちに持って行っちゃうという。



取材者（左）と田畑先生（右）

―学生時代の経験から、それは思います。

それをやらなきゃいけないんですよ。東北大だって今までアフリカやってた人をシベリアに持っていった、そんな感じですよ。（笑）

（取材：田宮　彩也香）

田畑　伸一郎（たばた　しんいちろう）

1957 年生
北海道大学名誉教授

東京大学教養学部卒業
一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了
同博士後期課程単位取得退学
1986 年　北海道大学スラブ研究センター　助教授
1997-2023 年　同教授（改称に伴い 2014 年からスラブ・ユーラシア研究センター教授）
2004-2006 年　同センター長
2015-2017 年　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長
現在　北海道大学名誉教授

望月喜市先生のご逝去

田畑　伸一郎（北海道大学名誉教授）

2023 年 11 月 25 日に本センターに長く務められた本学名誉教授の望月喜市先生が 92 歳で亡くなられました。望月先生は、立命館大学、小樽商科大学を経て、1978 年に本センターに着任され、1994 年に定年退官されるまで、本センターのソ連･ロシア経済研究を主導されました。その間、1983 年から 2 年間、本センターのセンター長も務められました。

望月先生の専門は主にソ連・ロシアの経済であり、ソ連・ロシア経済の実証分析、経済改革の現状分析において優れた業績を残されました。とくに、ソ連経済の再生産構造、国民所得循環ならびにそれに基づく軍事費の推計などに関する一連の業績が､高く評価されました。ソ連経済に関する統計情報が限られていた時期における先生の研究は、日本におけるソ連経済実証分析の先駆的業績と位置付けられます。そうした研究成果をまとめたものとして、『ソ連の経済統計』（アジア経済研究所、1974 年）、『ソ連経済の再生産構造：その統計的研究』（多賀出版、1984 年）などがあります。また、本センターのサイトにある「ソ連経済統計データベース」も、先生のイニシアティヴで始められたものでした。

先生の学問的業績のもう一つの特徴として、日本とソ連・ロシアとの経済関係の研究に本格的に取り組まれたことが挙げられます。この研究の延長線上として､日本に近いシベリア･極東経済の研究の面でも多くの先駆的な業績を残しています。このような先生の研究は、日本とソ連・ロシア、あるいは北海道とシベリア・極東との経済交流の発展に指針を与えるものとなりました。この分野に関しては、研究だけに留まらず、実際にこのような交流を発展させるために様々な形で尽力されたことも記しておきたいと思います。一方で､本センターは、ソ連やロシアに対する政策に関して、決して一枚岩の組織ではないので、内部の研究会において先生と他の同僚との間で、時として激しい議論が起きたりしたことも思い出されます。また、先生が退職後も、数年前まで、多くの研究会や集会で、北方領土問題解決のための提案や発言を繰り返されていたことも思い起こされます。

ご冥福をお祈りいたします。

※望月喜市先生の詳しい略歴と著作目録は、『スラヴ研究』No. 41（1994 年）の「望月喜市教授退官記念号」に掲載されています。

1994 年 望月喜市教授最終報告会

学界短信

学会カレンダー

2024 年	3 月 16–17 日	日本中央アジア学会 2023 年度年次大会　於京都大学 http://www.jacas.jp
	4 月 3–6 日	ABS (Association for Borderlands Studies) 2024 Annual Conference　於テキサス州サンアントニオ https://absborderlands.org/meetings/abs-annual-conference/
	4 月 5–7 日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Conference 2024　於ケンブリッジ大学 https://www.baseesconference.org
	5 月 16–18 日	ASN (Association for the Study of Nationalities) 28th Annual World Convention　於コロンビア大学 https://www.asnconvention.com/
	6 月 22–23 日	日本比較政治学会第 27 回研究大会　於立命館大学大阪いばらきキャンパス　https://www.jacpnet.org/convention/
	6 月 29–30 日	比較経済体制学会第 64 回大会　於大阪経済大学 http://www.jaces.info/info.html
	10 月 26–27 日	日本ロシア文学会第 74 回全国大会　於創価大学 https://yaar.jpn.org/
	11 月 15–17 日	日本国際政治学会 2024 年度研究大会　於札幌コンベンションセンター　https://jair.or.jp/
	11 月 21–24 日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) 56th Annual Convention　於ボストン https://www.aseees.org/convention

［編集部］

大学院だより

薛瑞凱さんの滞在

吉林大学大学院博士課程の薛瑞凱（Xue Ruikai、シュエ・ルイカイ）さんが、2022 年 10 月 30 日から 2023 年 10 月 28 日まで、特別研究学生としてセンターに滞在しました。当初は 2021 年 8 月に来日する予定でしたが、新型コロナ関連の移動規制により、1 年余り遅れて

の滞在でした。研究のメインテーマはポストソヴィエト空間におけるロシア外交の決定過程でしたが、フェルガナ盆地の民族問題へのロシアの態度、南コーカサスのパイプラインの地政学、西側制裁下でロシアがウクライナの戦場で用いる武器技術、19 世紀末の遼東半島をめぐる清露独 3 国の駆け引きなど、実に多様なトピックに取り組みました。帰国後の活躍が期待されます。［宇山］

編集室だより

Acta Slavica Iaponica

遅れております第 44 号は、編集作業が進んでいます。第 45 号は現在、査読者の講評が集まっているところです。［長縄］

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第 71 号については、8 月末に投稿が締め切られました。研究ノートと論文を合わせて 7 件の応募がありました。現在、2024 年初夏の出版を目指して厳正な審査を行っております。次号、第 72 号については 2024 年 8 月末日が締め切りとなります。数多くのご投稿をお待ちしております。［青島］

Eurasia Border Review

Eurasia Border Review の最新号は、2021 年 6 月、メキシコシティで早世したウリセス・グラナドス教授（メキシコ自治工科大学）の追悼号です。グラナドス教授は、東京大学で学位を取得した後、メキシコでも指折りの中国学者として著名で幅広い活躍をされてきました。2017 年のセンターの夏シンポでは、ラテンアメリカにおける中露関係について報告を行うなど、日本の研究者と密接に協力して活動されていました。追悼号では、恩師の濱下武志先生のメモワールをはじめ、教授を良く知る研究者たちの論文および教授の遺稿やエッセイなどを収録しています。

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/eurasia_border_review/vol13.html

［岩下］

『境界研究』

2023 年 8 月に北海道新聞根室支局及び稚内支局とのコラボで実施した「ウクライナ戦争に関するアンケート調査結果」詳報を収録した特集号が、『境界研究』別冊として刊行されました。結果は北海道新聞の全道版や地域版で大きく取りあげられましたが、別冊では対中国意識など報道されなかった回答も収録されています。今後の日露関係を境界地域の現場から考える資料として、どうぞご活用ください。

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/JapanBorderReview/SV/index.html

［岩下］

会議

センター協議員会

2023 年度第 5 回協議員会　9 月 29 日（オンライン開催）
議題
1. 教員人事 1 について
2. 教員人事 2 について

2023 年度第 6 回協議員会　11 月 14 日（オンライン開催）
議題
1. 教員人事 1 について
2. 教員人事 2 について
3. 教員人事 3 について
4. 次期センター長の選出について
5. 教員の再雇用について
6. 質保証の内規について
7. 令和 5 年度部局評価配分事業について

2023 年度第 7 回協議員会　11 月 21 日～ 22 日（メール開催）
議題
1. 教員人事 1（教授職）について
2. 教員人事 2（助教職）について
3. 次期センター長の選出について

［事務係］

みせらねあ

専任研究員消息

ウルフ・ディビット研究員は、7/17–9/20 の間、資料収集、講演会 “A Swing of the Pendulum: East and West, and the Russian Far East in Modern Russian History” 登壇（7/20）、ワークショップ出席（8/3–8/5）、国際ワークショップ出席（9/17–9/19）のため、ミュンヘン（ドイツ）、ニューヨーク、マディソン（アメリカ）、台北（台湾）に出張。

宇山智彦研究員は、8/19–9/3 の間、インタビュー調査（8/21–9/1）のため、バクー（アゼルバイジャン）、トビリシ（ジョージア）、エレバン（アルメニア）に出張。

青島陽子研究員は、8/22–9/4 の間、第 7 回境界領域の遺産セミナー参加（8/23–8/31）、資料調査のため、セント・アンドルーズ、グラスゴー（イギリス）に出張。

服部倫卓研究員は、8/28–9/8 の間、研究打合せ、情報収集、「アラスカ石油・ガス協会会議」出席（8/30–8/31）、Hilcorp North Slope 社視察のため、アンカレッジ、プルドーベイ（アメリカ）に出張。

長縄宣博研究員は、9/11–9/16 の間、国際シンポジウム ”Muddying the Waters: Towards a History of the Caspian Sea” 出席（9/13–9/14）のため、ウィーン（オーストリア）に出張。

野町素己研究員は、10/14–10/25 の間、資料収集、研究報告のため、ソフィア（ブルガリア）、スコピエ（北マケドニア）、ベオグラード（セルビア）に出張。

［事務係］

目　　次

研究の最前線 ……1

2023年度冬期国際シンポジウム開催される／ウクライナ及び隣接地域研究ユニット（通称：ウクライナ研究ユニット）設立事業採択される／生存戦略研究／「2023年度公開講座「どうなる？ どうする？ 日露関係」開催される／附置研・センター会議第3部会シンポジウム開催報告／ 2023年JCREES スラブ・ユーラシア研究サマースクール開催報告／スラブ・ユーラシア研究センター＆ソウル大学ロシア東欧ユーラシア研究所・合同セミナー開催される／国際ワークショップColonial and Postcolonial in Recent History of Central Asia の開催／ウクライナ関連イベント：岡野直氏講演会とウクライナ文学の夕べ／北大総合博物館常設展リニューアル「国境観光　境界地域やまぐちの魅力」（2023年10月から）／ JIBSNセミナー 2023「境界地域の移住と観光を考える」開催される／ UBRJ/EES 実社会のための共創研究セミナー「中東からみたウクライナ戦争」開催／アラスカにおける石油・ガス開発に関する現地調査／ 2023年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定・滞在／第3回百瀬フェローの決定／博士研究員のシャクマトフ・ルスランさんが第9回北大・部局横断シンポジウムでベストポスター賞を受賞／専任研究員セミナー／研究会活動

人事の動き ……27

事務職員の異動

第１回　マトリョーシカ・インタビュー ……28

田畑　伸一郎　名誉教授

望月喜市先生のご逝去 ……33

by 田畑　伸一郎

学界短信 ……34

学会カレンダー

大学院だより ……34

薛瑞凱さんの滞在

編集室だより ……35

Acta Slavica Iaponica ／『スラヴ研究』／ *Eurasia Border Review* ／『境界研究』

会議 ……36

センター協議員会

みせらねあ ……37

専任研究員消息

2023 年 12 月 28 日発行

編集　田宮彩也香、宇山智彦
発行者　野町素己
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北９条西７丁目
Tel.011-706-2388、706-3156
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/